

蕪島での長期的な標識調査によって解明されたウミネコの生態

成田 章¹・成田熹一²・富田直樹³・佐藤文男³・森本 元³・尾崎清明³

¹ウミネコ繁殖地蕪島を守る会 (青森県総合学校教育センター), ²八戸市, ³山階鳥研

青森県八戸市の蕪島は、ウミネコ繁殖地として国の天然記念物に指定され、ウミネコの繁殖を間近で観察することのできる国内唯一の場所である。この蕪島においてウミネコの生態調査は 1920 年代から行われ、ウミネコの様々な生態が解明されてきた。その生態調査の代表的なものとして標識調査がある。蕪島でのウミネコの標識調査は 1924 年から行われ、戦後は 1966 年に再開し、1972 年からは継続的な調査が行われている。特に、蕪島では長期的に 10 日齢以降の幼鳥への標識と、成鳥の再捕獲が行われており、個体群の年齢構成、移動経路、生存率、食性などが明らかにされている。特定の種で 50 年間調査が行われていることは希であり、価値があると思われる。本講演では、長期的な標識調査によって解明されたウミネコの生態について紹介する。

ウミネコは生まれた場所に帰還する習性があることから、幼鳥期に標識し、成鳥を再捕獲することによって年齢を特定することができる。例えば、1980 年から 2009 年までの再捕獲数は 5,800 個体であり、平均年齢 12.1 歳、最高齢 33 歳であった。年齢構成のグラフを見ると同齡集団 (コホート) 間で帰還数にばらつきがみられ、育雛期 (6 月) のやませによる冷夏と、越冬期 (1 - 3 月) の関東・常磐沖の表面海水温の両方が、各コホートの帰還率に影響することがわかった。各コホートの帰還率は、育雛期の気温が高いほど、越冬期である関東・常磐沖の表面海水温が低いほど高かったことから、繁殖期と越冬期の両方の環境要因が、生後 1 年以内の初期生存をとおして個体群動態を制御することを示した。

移動経路については、多くの標識回収記録をもとに地図上にプロットすることによってウミネコが季節的にどのような移動をしているのかを推定することができる。蕪島で繁殖を終えたウミネコは、8 月以降北海道へ北上し、10 月以降関東方面に南下し、1 月以降四国や九州方面へ移動することが解明された。

食性については、捕獲時の吐き戻しを回収し分類することによって明らかにすることができる。これまでの調査によって、ウミネコは、セグロイワシやコウイカの海水性の餌の他に、ミズアブの幼虫やオタマジャクシなど淡水性の餌を食べていることがわかった。

以上のように標識調査を長期的に行うことによって、ウミネコの生態について様々なことが解明されてきた。1 年間のデータは微々たるものであるが、積み重ねることによって多くの情報が得られる。今後も継続することによって、ウミネコの保護と蕪島の保全に貢献していきたい。